オーストラリア・ラトローブ大学プログラム

2023.8.22-9.30

参加者プロフィール

喜多凜太朗	2年	理工学研究科	理工学専攻
劉帥	2年	地域デザイン研究科	地域マネジメント専攻
大渕彩永	4年	芸術地域デザイン学部	芸術地域デザイン学科
高森春那	4年	経済学部	経済学科
上村真世	4年	経済学部	経済法学科
中原歩美	3年	経済学部	経済学科
矢ヶ部千宥	3年	経済学部	経済学科
中島大輝	3年	理工学部	応用化学コース
梅田莉奈	3年	農学部	生物資源科学科
荒木真央	2年	教育学部	初等教育主免英語専攻
龍浩希	2年	農学部	生物資源科学科
松本力輝	1年	教育学部	中等教育主免英語専攻
伊東大智	1年	芸術地域デザイン学部	芸術地域デザイン学科
福光希望	1年	経済学部	経済学科
池上遥	1年	農学部	生物資源科学科
井上琴葉	1年	農学部	生物資源科学科
坂田美羽	1年	農学部	生物資源科学科
坂本奈愛瑠	1年	農学部	生物資源科学科
村井志織	1年	農学部	生物資源科学科

スケジュール

6/12　オリエンテーション
6/21　日本史・日本文化特別講義
6/22　異文化コミュニケーション特別講義
7/8　危機管理講習
7/13　交換留学成果報告会
7/29　事前研修の発表会
8/22　福岡発、シンガポール経由
8/23　メルボルン着、ホームステイ先に到着
8/24　ラトローブ大学での英語研修開始
9/28　研修最終日
9/29　ホームステイ先を出発、メルボルン発
9/30　シンガポール経由、福岡着
10/10 成果発表
10/20 報告書提出

メルボルン

オーストラリアではシドニーの次に大きな人口 500 万の都市です。キャンベラに移されるまでオーストラリアの首都でした。メルボルンと日本の時差は 1 時間(10~3 月はサマータイムのため 2 時間) です。

ラトローブ大学

メルボルンにある公立大学で、世界各地から学生が集まっています。サイバーセキュリティを学べることで有名です。私たちは郊外のバンドゥーラにあるキャンパスへ 5 週間留学しました。学生へのサポートが手厚く、特にメンタルヘルスのケアが充実していました。

授業

平日の 10~12 時、13~15 時に開講されました。プレイスメントテストの結果でそれぞれのクラスに配置されました。クラスメイトは 10 人ほどの留学生で、グループワークが中心でした。パソコンを使って授業が進むので、バッテリーが切れることもあり、充電器と変圧器を携行する必要がありました。

バディ

初日にウェルカムパーティーが開かれ、佐賀大学の学生 1 人に対してラトローブ大学の学生 1~2 人がバディにつきました。大学について教えてもらったり、友人を紹介してもらったりしました。

ホームステイ

大学の近くの一般家庭に滞在しました。ホストファミリーは毎日食事を用意してくれました。ステイ先によってはルームメイトがいるところもありました。

外食

大学にはたくさんのレストランがありましたが、しっかりした昼食をとるには 10 ドルは必要でした。メルボルンシティには日本食レストランもありました。ほとんどの店ではテーブルに QR コードがあり、それをスマホで読み取って注文・決済しました。

買い物

現金を使う場面は一度もなく、クレジットカードでの支払いのみ可能な店までありました。トラブルがあっても返品できるよう、レシートを発行するのが慣例のようでした。物価は日本に比べて非常に高く感じました。店員と客どうしで楽しく会話する様子がよくみられました。

交通

トラム (路面電車) 、バス、電車があります。IC カードがあり、シティまではトラムで 1 時間、5 ドルでした。定刻運行は難しいようで、遅く来たり、逆に早く来たりしました。オーストラリアは車社会であり、車は路上に停められていました。すべての歩行者信号は押しボタン式でした。

気候

8~9 月は冬で、コートが必要な寒さでしたが、雪は降りませんでした。朝晩と日中の気温差が大きく、急な雨もよくありました。

メルボルンから学んだこと

地域デザイン研究科　修士 2 年生　劉帥

メルボルンでの留学生活は非常に印象的でした。私はメルボルンの現地の家庭でホームステイの体験をし、現地の大学の生活に深く触れることができました。この期間中、多くの学生との交流を持ち、異文化の中での生活や学習のスタイルについての理解を深めました。特に、ホームステイ家庭では、オーストラリアやフィリピンの日常生活や文化についての多くの話をする機会がありました。

メルボルンの博物館や歴史的な場所を訪れる中で、オーストラリアの歴史や文化について深く学ぶことができました。私が地域デザインの学生として、これらの場所で得た知識や体験は、将来の人生において非常に役立つでしょう。実際に目にした展示や情報を、将来の学生に伝えるために、多くのメモや写真を撮りました。

さらに、大学のキャンパスライフも非常に魅力的でした。大学内には多くの学習スペースやリラックスできる場所が確保されており、学生たちは自分の学習スタイルや状況に応じて、最適な場所を選び学習を進めていました。

最後に、メルボルンに留学している他の学生や先輩たちとの交流を通じて、多くの有益な情報やアドバイスを受け取りました。これらの経験や情報は、私の留学生活をより豊かで充実したものにしてくれました。

研修を終えて

芸術地域デザイン学部 4 年 大渕彩永

私は、入学当初から海外に興味があり、英語の勉強や佐賀大学内での国際交流活動に取り組んできました。また、初めての海外が高校の修学旅行で訪れたオーストラリアで、その時の記憶が印象的に残っておりもう一度行ってみたいと考えていました。今回の研修には、英語のスピーキング能力の向上を目標に参加しました。これまで英会話教室で英語を練習してきましたが、英語の先生以外と話す機会がなかったため、実践の場を得たいと考えていました。

研修の中で印象に残っていることは、人種の多様性です。通っていた大学も、メルボルンの街中にいる人も、現地の友人も皆多様な人種で、様々なルーツを持つ人ばかりでした。例えば、通っていた語学学校は、様々な国の人が通っており、私の所属したクラスには、ベトナム、カンボジア、中国等の方々がいました。授業でも、それぞれの文化を共有したり比較したりする科目があり、授業でのディスカッションは現地でしか体験できない貴重な学びだったと思います。また、ラトローブ大学全体を見ても様々な人種が集まっていました。今回のプログラムにはバディプログラムというものがあり、ラトローブ大学の学生とペアになって、放課後や休日に時間を過ごしました。私のバディは 2 人いたのですが、インド人と中国人の方で、どちらも母国で過ごした後メルボルンに移住していました。私はこれまで複数の国での生活を経験した人に出会ったことがないため、2 人の過去の話はとても興味深かったです。また、バディとその友人と出掛けた際も国籍は多様で、それぞれの言語が飛び交っていました。互いの言語や文化に興味があるのは、とても素敵なことだと思いました。また、人種の多様性は街に出た際も感じました。メルボルンの中心街でも、多種多様な人種を見かけることができます。また、チャイナタウンやイタリア人街等の通りがあり、それらを訪れ

た際に印象に残っていることがあります。メルボルンでは、中華料理店に行くと、中国人やアジア系の人が多い、といったように、ある国の料理のレストランには、その国にルーツがある人が集まっている印象でした。私が中華料理店に行った時には、中国人と間違えられて中国語で話しかけられる場面もありました。日本では、基本的にどこに行っても日本人ばかりなので、オーストラリアならではの光景だと思いました。

今回の研修での経験は、すべてが目新しく新鮮でした。また、英語でコミュニケーションが取れるようになったり、日常的に英語を使うことに慣れを感じてきたりしたことで、英語の勉強により楽しさを感じるようになりました。今後も英語学習を継続していきたいと思います。

メルボルンの中心街にあるフリンダースストリート駅

短期留学を通して学んだこと

経済学部 4 年　高森春那

私がこのプログラムに参加しようと思った理由は、自分の英語力、特にスピーキング力を向上させたいと思ったから、また、社会人になる前に海外に行き、異文化交流をしたいと思ったからである。初めての海外で少し戸惑うこともあったが、オーストラリアで 5 週間生活し、生活、文化や価値観などを様々なことを学ぶことができた。以下では、オーストラリアで学んだこと、感じたことを述べていく。

まず、ホームステイについて述べる。私のホストファミリーはインド出身のホストマザー、マレーシア出身のホストファザーだった。加えて、大学生のベトナム人留学生 2 人と高校生のベトナム人留学生 1 人のハウスメイトがいた。初日、とても緊張している私に、ホストマザーが「ここがあなたの家で、私は第 2 のお母さんだからね。」と笑顔で言ってくれて、とても安心した記憶がある。ここがあなたの家だから、お手伝いもしてね、と言われ、毎日、夕食後に食器を拭いたり、片づけたりした。この時間が私はとても好きで、ホストマザーやハウスメイトに佐賀のことや私の家族のこと、その日にあったことなどたくさん話をした。よく英語が出てこず、言葉に詰まったが、「何でも言っていいよ、私が頑張って理解するから」と言ってもらったことが、英語を話す自信につながったと思っている。この時に、キリスト教についても教えてもらった。ホストマザーが話している英語は理解できたが、内容の理解にとても時間がかかった。なぜなら、授業で習った以上のキリスト教的な考えは今まで触れたことがなく、初めての考え方だったからである。食事については、米、パスタ、ピザ、キッシュ、豚肉、鶏肉、牛肉、ラム肉、えび、魚など毎日違ったものを出してくれた。主食と野菜、肉や魚などのメインの 3 つは必ずあり、バランスの取れた食事だった。私がこのプログラムで一番感謝しているのはホストマザーである。毎日、笑顔で接してくれ、本当の家族のように、掃除しなさい、連絡をきちんとしなさい、と叱ってもくれたし、相談にも乗ってくれた。

次に、授業について述べる。クラスメイトは約 20 人で、ベトナム、タイ、カンボジア、サウジアラビアからの留学生だった。私がこのクラスで一番苦労したことは、ベトナム人の話す英語を理解することだった。今まで日本ではアメリカ英語をメインとして学んできたため、ベトナム語訛りの英語は聞きなれず、何度も聞き返して会話がスムーズにいかないことが多かった。だんだん会話していくにつれて、単語の最後が消えがちなことや発音の癖な

どの聞き取れなかった理由がわかり、テンポよく会話をすることができるようになった。授業の内容はアカデミックな英語を身につけるために、パラグラフの書き方やプレゼンでの話し方などを学んだ。授業中は積極的に発言する人が多く、クラスメイトがすらすらと自分の意見を述べる一方で、私は 2、3 文の英語を途切れ途切れに言うのがやっとだった。それでも先生やクラスメイトは理解してくれた。また、クラス全体として、間違いをあまり気にしない雰囲気があり、ためらわずに英語を話すことができた。これらがスピーキング力を向上できた要因であると考える。

約 40 日間オーストラリアで過ごしてみて、自分の英語に少しは自信が持てたものの、たくさんの課題も見つかり、今後の英語学習のモチベーションへとつながった。また、この留学を通して、出会った佐賀大学の友人、オーストラリアで出会ったホストファミリー、クラスメイト、バディととても楽しく、充実した時間を過ごすことができ、このプログラムに参加して本当に良かったと思う。

↑9/1 クラスでシティへ小旅行

↑9/28 最後の授業で先生と

SUSAP オーストラリア研修成果報告書

経済学部経済法学科 4 年　上村真世

私の SUSAP オーストラリア研修に参加した目的は様々な人や価値観に触れて自分自身を成長させたいと思ったからです。

今回の SUSAP オーストラリア研修を通して学んだことは大きく分けて 2 点あります。

一つ目に、外国で暮らすということは日本での生活と何もかもが違うということです。頭では分かっていましたが実際体験してみて多くの驚きがありました。ホームステイということもあって慣れ親しんだ家ではない家、乗り方すら分からない公共交通機関、味の想像もつかないご飯。目に入るもの全てが新鮮で未知のものでした。例えば、オーストラリアでは停留所でバスを待っていても手を上げないと止まってくれません。車内には次の停留所が書かれている画面やアナウンスは無く自分で地図を見ていないと乗り過ごしてしまいます。バスを降りるためのボタンを押しても止まってくれず次のバス停まで行くこともありました。最初は分からないことも英語で言いたいことが話せず自分を無力に感じていました。

二つ目は、自分の意見は自分で言わないと伝わらないことです。私はこれまでコミュニケーションを取る際にスト

レートな表現はあまり使ってこなかったです。そして、私自身も相手の発言から相手の感情や本心を汲み取るようにしていました。しかし、オーストラリアでの私のホストファミリーは一切私の気持ちを察してくれることはなく、私が伝えたことだけを受け取っていました。それが良い悪いということではなく、異なった環境や背景で生きてきた人同士が相手の考えを想像出来ないことは当然であり、自分で言う必要があると学びました。

オーストラリアで学んだこと

経済学部３年　中原歩美

今回のオーストラリア研修は、私にとって２回目の海外だった。以前台湾研修に行ったときは、思っていたよりも英語力の向上が出来なかったため、今回は英語力、特にスピーキングスキルの向上を目指して今回の研修に臨んだ。また、今回は初めてのホームステイであったため、実家暮らしの私としては、家族以外と暮らす初めての経験であった。今回の研修で印象深かったことは３つある。

１つめは、オーストラリアと日本の違いだ。オーストラリアで暮らす上で、様々な違いに気づいた。例えば、家族が帰ってきたときなどに挨拶としてキスをする、バスのアナウンスがない、冬にとても乾燥する、傘をあまり差さない、ハンカチで鼻をかむ、などだ。一番驚いた違いは、若い人は長い髪をしているということだ。ホストマザーによると、オーストラリアでは、髪を短くするのは早くても３０歳くらいになってかららしく、初めて会ったとき私が短い髪をしていたのでとても驚いたと言われた。また、日本ではアメリカ英語を学ぶので、最初はオーストラリアなまりの英語に戸惑った。初めはなかなか英語が聞き取れず、「ダイ」と言っているのが頻繁に聞こえた。なんで何度も死ぬって言ってるのか疑問に思っていたが、後でday だったことが分かった。オーストラリアでは day はダイ、a.m.はアイエムのようにきこえた。また、小学校はelementary school ではなく primary school など学校の呼び方も違って混乱した。オーストラリアがイギリス英語に近いと言うことを忘れていたので、事前に準備し忘れていたので事前に少し調べておくべきだったと思う。

２つめは、お店の店員さんが優しかったことだ。自分がお店に入ると、Hi, how are you?と笑顔で言ってくれ、いろいろ見て回っているとDo you need a hand？支払い終わったらHave a nice day!と言ってくれた。特に自分が気に入ったフレーズはHave a lovely day!だった。今まではHave a nice day!しか知らなかったが、女性の店員さんにHave a lovely day!といわれたとき、衝撃だったし、自分もこっちの方を使いたいと感じた。また、ホストファミリーとフィッシュアンドチップスを食べたとき、頼んでないのにポテトケーキが１つ多く入っていた。店員さんのミスかと思っていたが、ホストファミリーに聞いたらそれが普通だよと言われてとても驚いた。でも多すぎて残してしまったので、もったいなかったと感じる。

３つめは、オーストラリアで遭遇したトラブルだ。トラブルと言うほど大きな問題ではないが、バスを逃したこと

だ。自分は毎日バスで大学に通ったが、オーストラリアのバスはほとんど遅れてきていたため、気を抜いていたら、１日だけ早く来たときがあり、それに気づかず、気づいたときにはバスが行ってしまっていた。また、オーストラリアのスーパーは毎週水曜日に半額になる商品が変わるが、オーストラリアに来て、初めあたりはそのことを知らず、３０ドルのフェイスクリームを家族へのお土産として買ったら、次の週に半額になって落ち込んだ。いろいろなことがあったが、嫌だったことも今となってはいい思い出だ。

今回の研修でいろいろなことを学ぶことが出来た。４０日間は、長かったようで短かった。半分くらい過ぎたときに日本食が恋しくなり、日本に帰りたいと思うことはあった物の、とても楽しい時間をオーストラリアで過ごすことが出来た。最初はホームステイであることが楽しみでもあったが、うまく暮らしていけるかとても不安だった。しかしなんとか１ヶ月ほど問題なく暮らしていけたので、自信になった。オーストラリアで過ごして、自分の英語力がまだまだだと痛感することが出来たので、これからも英語の学習をコツコツとやっていきたいと思う。

同じクラスの人たちと

オーストラリアでの発見と成長

経済学部経済学科 ３年矢ヶ部　千有

今回私がこのオーストラリアの短期研修プログラムに参加したきっかけは、前回参加したアメリカでのプログラムを経験したうえで、同じ多文化社会の国でも違いを見つけられるのではないかと考えたからです。前回のアメリカでの短期研修では大学での授業、それ以外の活動でも日本では経験できない貴重な経験をすることができました。今回は前回のアメリカ短期研修の経験を活かし、日本とだけでなくアメリカとの文化や習慣の違いや共通点を感じたいと考えました。また、前回は３・４年生の先輩方に支えていただきプログラム達成にこぎつけましたが今回は高学年として、そして経験者としての自覚を持ちメンバーを引っ張っていく役割を果たしたいと考えました。

私が感じた最も大きな違いの一つは「水」に対する価値観です。オーストラリアでは年間の降水量がとても少ないため「水」はとても貴重なものです。スーパーマーケットや自動販売機で売られている 500ml のペットボトルの飲み水は日本円で 300 円ほどしました。そのため、現地の人々は外出するときは必ず水筒を持ち歩いていました。大学には、ウォーターサーバーがところどころありましたがアメリカの大学と比べて少なく感じました。また、毎日の入浴は、生活する中で大量に水を使う場面です。そのため私のホームステイ先では、一日のシャワーの時間が５分と制限されていました。最初はその短さに慣れず、長く浴びてしまうこともありました。さらに洗濯も一度に大量の水を使うため、バスタオルは週に１回しか洗濯できず、毎日同じものを乾かして使用していました。「水」が気にすることなく使える日本との違いを知ることで、より大切さを理解することができました。

多文化社会の面から感じたことも様々ありました。私のバディは、両親がイタリア人の学生でした。彼女がラトローブ大学の友達を紹介してくれましたが、みんなそれ

ぞれ異なる国の出身であり様々な文化を学ぶことができました。オーストラリアではもちろん日本と比べて多くの文化が共存していましたが、アメリカと比べても非常に多くの文化を肌で感じることができました。そのほかの面では同じクラスのサウジアラビア人の留学生との交流の中で見つけることができました。それは、発音の授業で日本人が"L"と"R"の発音の違いが苦手なことと同様に、アラビア語を話すサウジアラビア人は"B"と"P"の発音の違いが難しいと知りました。母国語の違いで慣れない発音に違いがあることが興味深かったです。大学の中の飲食店には多くの国の食文化や宗教に配慮したハラールの食べ物を見つけることができました。

今回の短期海外研修に行くことで、日本以外の国の違いや共通点を見つけることができました。前回のアメリカ研修で私は初めて海外に行き、日本との多くの違いを学びました。そこから、私は日本と大きく違うアメリカの文化をなんとなく外国全般の文化として捉えていました。しかし、国によって文化はもちろん異なりそれぞれの個性があります。今回実際に2か国目のオーストラリアに行ってオーストラリア特有の文化をたくさん学ぶことができました。多くの国に実際に足を運ぶことで違う文化に対する偏見が減り、視野を広く持てると考えました。さらに英語や文化を学ぶだけでなく、今までなったことがなかったグループのリーダーとして事前研修や事後研修でメンバーをまとめることができたと感じました。このように、SUSAP では海外での生活はもちろん、新しいことに挑戦する機会をたくさん得ることができ、自信をつけることができました。この自信をこれからの新しいことにつなげていくことで大きな価値となると考えます。

バディとのナイトマーケット

今回の研修で自分が学んだこと

応用化学コース中島大輝

私は8月の終わりごろから9月いっぱいでオーストラリアのメルボルンに留学していました。私が今回のオーストラリア留学で最も学んだことは多様性です。多国籍国家であるオーストラリアでは、ヨーロッパ系やアジア系、アフリカ系など様々な人種の多くが共存しています。そして、初対面であったとしてもオーストラリアの人々はすぐに他人を受け入れ、他の国の文化や宗教、政治などに強く関心を抱いています。一度メルボルンの中心街で自分のホストファミリーの息子と日本から一緒にやって来た中国の友達と私で偶然話す機会がありました。その息子は中国の文化や国内情勢にとても関心を抱いており、その友人を質問攻めにしていました。話を終え、中国の友人と別れたあと、「彼はいい少年だね。」と、彼を象徴していました。このようにオーストラリアの人々は他人と同じ目線で話し、リスペクトしていると強く感じ、世界の国々に対して豊かな好奇心を持っていました。また、オーストラリアの人々には、出身はオーストラリアだが先祖が移民として戦後、他国からやって来た人が多くいました。それは日本人の感覚からすると、一つの国に世界中の国の人々が集まっている、もしくはオーストラリアには沢山の民族や部族が存在している感覚でした。そして、彼らは自身の元の国の文化や宗教をとても重んじていました。加えて、英語のみな

らずその国の言語も喋れます。ある意味、日本人が母国語以外の言語を喋れない理由の一つがこれであると思いました。また、宗教に対して私自身、現代社会の戦争を引き起こす因子で悪影響を及ぼすと考えていました。しかし、私自身のホストファミリーはキリスト教の正教会の宗派に属しており、とても心が綺麗で人として正しいライフスタイルを送っており、見習うことが多くありました。これから私は宗教に対するこれまでの見方が変わり、宗教は人の考えの軸の一つとなり、よりポジティブで美しい人間形成に影響するものだと思いました。

私は今回の研修で、日本人のみではなく様々な人種の人とコミュニケーションをとることは自分の世界をより広くし、自身の成長につながると感じました。そして、様々な人種がいる中で自分らしく生きることはとても大切だなと思いました。

最後に留学を考えている人にとっては、１か月の留学は英語を習得するのには困難で無駄だと思われるかもしれません。しかし、他国の生活に飛び込むことは、より英語の重要性を感じる経験になると思います。

オーストラリア留学

生物資源科学科　梅田莉奈

私は今回の SUSAP でオーストラリア留学に参加した。今まで、海外に行った経験は全くなく、すべてが初めての世界であった。40 日間というかなり長い期間をオーストラリアで生活した。事前研修では、人種差別のことやスリが多いことなど恐怖を感じてしまうことを学んでいたが、実際には何の被害を受けることはなく不安なこともなく生活できた。40 日間生活して感じたことは、オーストラリアは本当に多国籍の国であり、多文化、多民族の国であるということだ。しかし、お互いがお互いを敵視することなく、尊重しあっており、優しい人が多い国であった。

私は、英語が一番苦手意識を持っている科目である。そのため、この苦手意識を克服したいと感じ、今回留学に挑戦した。今回の短期留学を通じて、聞く力はかなり上がったと感じる。お店や学校、家でも英語が聞こえるため、最初は本当に何を言っているのかわからなかったし、音楽のように感じてしまっていた。また、初日はホームステイ先のホストマザーとハウスメイトの日本人が楽しそうに流暢な英語で会話していて、内容もよくわからないし、話せないことからこの先やっていけるか不安でいっぱいだった。しかし、生活をしていく中で、耳が英語に慣れてきて、最後の週にはホストマザーの話の内

容が完全ではないが理解できるようになり、自分の言いたいことを以前よりも伝えることができるようになった。ホストマザーからもあなたの英語力は昔と比較すると大きくアップしている。最初は何を言っても伝わっていなかったわ。今は理解して話せているからこのまま英語に触れ続けていきなさい。と言われた。嬉しい反面最初にそのように思われていたことを恥ずかしく感じた。英語しかない環境下で生活したからことの結果であると思うので、留学に来て正解がと感じた。また、文法ができていなくてもどうにか伝わるため、買い物などもそこまで困ることはなかった。どうにかなるは本当だと感じてしまった。

大学がある日は出かけることは少なく、遠出するのはほとんど土日であった。メルボルンの中で一番行って良かったと感じたのはグレートオーシャンロードである。侵食岩がいくつかあり、本当に綺麗であった。海の色も透き通った青色であった。私たちがツアーに参加した日は天気がとても良い日であった。メルボルンにいて一日中雨が降っている日はなく、雨が朝降っていても昼間には晴れていることなどが多くあり、天候の変わりやすい国であった。

次はごはんについてです。私は元々和食や白ご飯よりジャンクフードやパンの方が好きであるためか日本食が恋しいと感じることは一度もなかった。しかし、周りの友達はインスタントのお味噌汁を飲んだり、白ご飯を食べたいとよく言っていたため、日本食を恋しく感じるのにかなり個人差があると感じた。下記の写真はホストマザーが作ってくれたごはんの写真である。友達は昨日のごはんがあまり美味しくなくて食べれなかったといっていた日が多くあったが、私は毎日ご飯が楽しみなくらい美味しいごはんだった。

しかし、ホストマザーが別居している旦那さんに会いに金土日や最後の二週間は仕事がお休みであったため、週 4 ほど家に帰ってこない日があったので、その時は電子レンジで温めるごはんが準備されていた。

この上の写真のごはんがこのシリーズの中では一番美味しかった。

メルボルンで一番おいしいと感じたものはアイスクリームである。かなりの頻度で食べており、合計で 15 回食べていた。日本に帰ってきて一番恋しく感じているものはアイスクリームである。ビスコッフ味が美味しくて何回もリピートしてしまった。

今回の留学を通じて、新しいことにたくさん触れることができた。人がみんな優しく、いい人ばかりであった。食べ物もおいしく、かなり栄えており、また行きたいと感じた。素敵な経験をすることができ、留学に行って正解だと感じている。いろいろな国にこれから行ってみたい。

４０日間の短期留学を通して

教育学部２年　荒木真央

今回、私がオーストラリア留学プログラムに参加した理由は英語力の向上と異文化に直接触れたい、留学をしてみたいという思いからでした。私は教育学部で英語を専攻しており、英語の教員免許を取得するつもりです。そのためにも、できるだけ早い段階で海外に行って、海外について知りたいと思っていました。大学で学ぶうちに、英語教師は英語力だけでなく、異文化についても理解しておく必要があるなと感じていました。海外の文化や歴史について詳しくはないのですが、オーストラリアは多文化の国という話を聞いたことがあったため、異文化について学ぶことが多いのではないかなと思い、オーストラリアへの留学を決意しました。また、この留学プログラムはホームステイだったことも留学を決めたひとつの理由でした。

実際にオーストラリアに行ってみて、本当に多民族社会なのだなと感じました。以前から聞いてはいましたが、思っていた以上に多民族な国で驚きました。今回のホームステイ先の方もオーストラリア人ではない人が多かったように思います。そのため、スーパーにはアジアの調味料もたくさん売られていたし、アジアの飲食店も多かったです。

また、ホームステイをしてみて感じたこともいくつかあります。まずは洗濯を週に１回しかしないということです。私は最初すごく驚き戸惑いました。オーストラリアは水道代が高いため、お風呂も基本シャワーだけで、食器も洗浄機に満タンになってから一気に洗っていました。そのため、ホームステイ先でホストファミリーが家事をしている姿はあまり見なかったように思います。毎日の家事は料理だけで、残りの家事は週末に夫婦二人で一緒にしているイメージが強かったです。日本ではこのようなことはめったにないので驚きましたが、これも文化の違いだなと思ったし、私は家事を週末に二人でしているというのはすごくいいなと思いました。食事に関しては、朝はシリアルやトースト、昼は大学内の施設で、夜はホストファミリーに作ってもらっていました。ホストファミリーが作ってくれた料理はどれもとてもおいしかったです。私のホストファミリーはお米の日もありましたが、パスタやパンなど小麦粉を使った料理が多かったです。夕食時にホストファミリーと話したりおすすめの場所を教えてもらったりしてコミュニケーションを取ることができました。昼食は大学内にあるフードコートのようなところで食べられるのですが、物価が高いので私はスーパーなどで買ったりしていました。

語学学校の授業に関しては、佐賀大学の英語の授業と同じように教科書を中心に進めていくスタイルでした。ですが、私たちのクラスはコミュニケーションを大事にされていて会話をする時間も多く取られていました。語学学校の先生にもたくさんおすすめの場所を教えてもらいました。授業の中で他のクラスと合同で遠足に行ったり、最後の日にはパーティーをしたりもしました。

また、私たちの留学生活をサポートしてくれるバディがついてくれました。私のバディは日本への留学経験があって、ラトローブ大学でも日本語を勉強しているので簡単な日本語での会話もできました。休みの日には観光地にも連れて行ってくれてたくさんの思い出を作ることができました。また、日本に留学していた時のことを聞くこともできて、日本とオーストラリアの文化の違いや驚いたことなど意見を共有することができました。また日本に行きたいと言ってくれていたので日本に来た時には九州を紹介したいです。そして、ほとんど知らない地域でこのようにいろいろ教えてくれたことはすごくありがたかったので、私も佐賀大学に来ている留学生にいろいろ教えてあげたりしたいなと思いました。

今回の留学を通してさまざまな経験ができたし、新たな価値観を知ることができました。以前よりも自分と異なる考え方をもっている相手を受け入れて違いを認めることができるようになったのではないかなと思います。実際に海外で英語を活用していく中で自分の英語力のなさを痛感することも多かったので、もっと勉強が必要だなと感じました。しかし、留学前までは海外に行くことはすごくハードルが高いと思っていたけどこの研修を通して、そのハードルが低くなりました。これからはもっと海外に目を向けて、佐賀大学などでの国際交流にも積極的に参加したいなと思いました。

バディとおでかけ

ホームステイ先

ホストファミリーのごはん

研修で達成したこと

農学部２年 龍浩希

私は研修を通して２つのことを達成しました。

まず、英語を使う能力を向上させることができました。ラトローブ大学にはユニバーシティとカレッジがあり、ユニバーシティの学生の半分以上は海外にルーツを持っていて、カレッジの学生は全員留学生でした。私たちはカレッジでアカデミック英語を学びました。１回２時間の授業を平日に１日２回受け、５週間通いました。クラスメイトは１０人だけでしたが、香港、ベトナム、カンボジア、スリランカ、チリ、クエートといった世界各地から集まっていました。英語を英語で学ぶという点に興味があったのですが、日本の中学・高校・大学での英語学習とは異なる点がありました。授業では個人での学習は少なく、グループワークが中心だったので、英語で自分の考えを伝える力を伸ばすことができました。この授業の中心的な課題は、アンケート調査を行って報告書を作成し、調査結果のグラフを示しながらプレゼンすることでした。その過程で英語での学問的な文章の書き方を修得しました。ライティングに関してはほかにも、動画を見ながらメモを取ったり、文章を要約したりしました。リ

ーディングについては、文章を大まかに読むスキムと、文章を詳細まで読むスキャンの違いを学びました。今までは英語の文法や単語を中心に学んできましたが、このように英語をどうやって使えばよいか学ぶ機会は少なかったので、初めて知ることばかりでした。
また、文化や価値観の違いを超えた交流を経験することができました。この研修ではホームステイで滞在することになっていました。ほかの方の家に５週間も滞在するようなことは今までなかったので、どのような生活になるのか全く想像がつきませんでしたが、ホストファミリーとルームメイトはとても優しく、夕食のたびに自分の国での思い出を話したり、郷土料理に挑戦したりしました。私たちにはユニバーシティやカレッジの学生がバディーとしてついていました。私についていた２人はとてもアクティブで、大学で友人を紹介してくれたり、シティに連れて行ってくれたりしました。シティはいつもにぎわっていて、ショッピングセンターやレストラン、マーケット、公園などを訪れました。そのなかで、オーストラリアで人々がどのように生活しているのか知ることができました。最初は言われるがままについて行くだけで精一杯でしたが、しだいに自分からも行きたいところや、やりたいことを提案しながら、お互いに楽しい思い出を残すことができました。また、大学には、はかまなかまという日本文化クラブがありました。毎週の活動に参加し、日本語で会話したり、テーブルゲームをしたりしながら交流を深めました。メンバーは日本に強い関心があり、日本人である私でさえ知らないことを知っていて驚きました。週末にはイベントが計画され、カラオケやビーチに行きました。カレッジでは、クラスメイトと一緒に昼食をとったり、図書館で宿題を終わらせたりしました。クラスメイトは語学力の向上という共通の目標に向かって大学に通っているので親近感がありました。そのおかげで全ての授業に出席することができました。こうして知り合った友人たちを招いて、ホームステイ先で帰国前にパーティをしたことは最も印象に残っています。友人やホストファミリー、ルームメイトといったオーストラリアでお世話になった人たちがひとつの場所に集まり、楽しい時間を過ごしました。
英語を勉強したい人にとって、オンラインでの海外研修も有効な手段ですが、こういったかけがえのない経験を得るためには、実際に海外渡航するほかに方法はありません。私は大学１年生のときから海外留学について考えていたのですが、忙しくなる３年次の前に海外留学を実現することができました。海外留学は終わってしまいましたが、そこで学んだことは今後も役に立つと考えています。アカデミック英語の知識は自分の専門分野で英語の文章を読み書きする際に生かすことができます。また、佐賀大学では留学生と交流する機会が多くあります。自分が得た知識や経験をこれからの大学生活で生かしていきたいです。

「気づき」

教育学部中等教育主免専攻　１年　松本力輝

私は、英語力を向上させること、自分が海外に順応できるかを確かめることを目的とし、今回の研修に参加した。
まず、英語力の面では、リスニング、スピーキングの面で大きな変化を感じた。日本にいた際は英語を使うということが全くなかったので、オーストラリアへ行ってそこが一変した。家では英語のラジオやテレビが常に流れ、ホストファミリーとは英語で会話をする。大学に行っても、授業や会話は英語を使用する。また、店へ行っても、

メニューやチラシ、接客はすべて英語。必然的に英語に触れる時間が増え、特に鍛えることを意識せずとも、リスニング力とスピーキング力は向上していった。しかし、リーディングやライティング面では、あまり成長を感じなかった。というのも、日本で英語を学んできた約６年の間、リーディングとライティングを中心として授業を受けてきていたため、さほどそれらと触れる時間が変化しなかったからだと考える。また、英語力という面でさらに感じたことがある。それは、英語力よりも、いわゆるコミュ力のほうが重要だということだ。オーストラリアに来て、知らない人と話すことがものすごく増えた。新しい家族や友達、店員、街中や電車などの中で出会った、見ず知らずの人々。初めは声をかけられることに戸惑ったが、現地で生活していく中でだんだんとそれに慣れていき、それに応えるだけでなく自分から声をかけることも増えていった。そのような small talk に応えるには、英語が使えることよりも、他人と臆せずに話すことができる力の方が必要だと感じた。また、自分が上手く英語で答えることができなくても、ほとんどの人が丁寧に理解しようとしてくれた。言葉を言い換えたり、話す速度を抑えてくれたり、文字を書いてくれたりして、全力で会話をしようとしてくれた。さらに、文法の間違えや、発音の間違いがあったとしても、会話が止まることはなく、それを指摘されるようなことも、ほとんどなかった。英語ができないことを蔑んだりするような人はおらず、間違いを恐れることがなくなり、積極的に会話をし、コミュニケーションを楽しむことができた。また、英語がわからなくても、ジェスチャーや表情と単語を駆使することで大体のことは乗り切ることができた。そのため、表情のレパートリーがものすごく増え、自分の感情を伝えるのがとても上手くなった。さらに、ジェスチャーと表情で会話が成り立ったため、翻訳アプリを使って会話をすることは一度もなかった。それから、会話についてさらに気づいたことがある。それは、共通の話題がないと、会話に困るということだ。特に、好きな歌、映画などの話題で日本のものしか知らなければ、話は全く盛り上がらないと感じた。私は海外の歌手や映画にはあまり詳しくなかったので、この話題が出た時には苦労した。幅広い趣味を持っておくことのほうが英語力よりもはるかに大切だと痛感した。これからは洋楽や洋画も積極的に視聴していきたい。

次に、海外に順応できたかという点について述べたいと思う。今回、私は人生で初めて海外へ行った。まず、英語で生活するという点では、先ほどにも述べたように、あまり困ったことはなかった。次に、生活様式の変化についてだが、そこでは、大きな変化を感じた。私は今回、ホームステイという形でオーストラリアで生活した。知らない人の家で生活するというのは、とても快適ではあったが、すこし気が引けるものだった。ホストファミリーはおばあちゃんのマザーがひとりと、一緒に SUSAP に参加した佐賀大学生ひとりで、私を含め３人で約１ヶ月生活した。マザーはとても優しく、そこが日本の自分の家だと思って生活して欲しいと言われた。お腹が減った時はいつでも、家にあるものはなんでも食べることができて、洗濯やお風呂はいつ、何回行ってもよかった。いつもご飯を作ってくれるだけでなく、自分たちの部屋の掃除などもしてくれた。時間がある時は車で私たちを遊びに連れていってくれて、私たちが幸せな思い出を作れるようにしてくれた。とても優しいマザーだったが、私はいつもどこかで申し訳なさを感じていた。そこが唯一、ホームステイが自分に合わないと感じたところだった。しかし、現地の家庭で生活するということは、私にとってオーストラリアの文化を体験するとても良い機会となった。家の中では靴のまま生活し、基本洗濯は週に１回でまとめて洗う、箸が家にはなく、料理も日本とは全く異なる。さまざまな生活習慣の違いを感じたが、自分にとって１番違和感があったのが、「ただいま」、「おかえり」がないことだった。あまりたいしたことがないようなことに思えるが、実際の生活の中でこのことばを使わないことは、なぜかとてもむず痒い気持ちになった。オーストラリアでは、帰ってきた時、出迎える時に”hello”というがそれは最後まで自分にとってしっくりこなかった。他の部分では、初めは違和感を感じたが、徐々に馴染んでい

き、終盤にはそれが当たり前になっていた。ナイフやフォークの使い方も、高級店へ行っても恥ずかしくないほど、上達した。加えて、オーストラリアでは他のたくさんの国の文化を感じ入ることができた。大学では、ベトナム、カンボジア、サウジアラビア、中国、ロシアなどさまざまな国にルーツを持つ生徒と仲良くなることができた。共に授業を受ける中で、それらの国との文化の違いをたくさん知ることができた。成人年齢や飲酒、喫煙、運転、結婚などができるようになる年齢、食文化や、挨拶、時間を守ることに対する意識の違いなど、さまざまな違いを知った。しかし、オーストラリアで生活していく中で感じたのは、違いよりも共通点の方が多いということだ。私たちは同じものを食べ、同じ施設を使い、同じ言語（英語）を話し、同じ趣味を持つ。人種は違えど、自分が隔離された存在であるように感じることはなく、相手を違う存在と認識することもなかった。海外で生活していくということは、思っていたよりも快適で楽しかった。困惑することも多かったが、時間が経つにつれて、それらにも順応していくことができることを知ることができた。将来、海外で仕事をしたいと考える自分にとってこの経験は、自分に自信をもたらしてくれたと思う。
今回の研修を通して、自分がいかに恵まれた環境にいるのかを知った。研修に参加させてくれた両親、あたたかく迎え入れてくれたホストマザー、たくさんのことを教えてくださり、サポートしてくださった先生方、互いに協力し合い、時間を共にしてくれた友人たち。彼らのおかげで今の自分がいて、これからを生きることができていることを胸に刻んで生きていきたい。最後に、今回の研修で多くの時間を過ごした Rin, Sae, Daichi, Nozomu, Shiori, Kotoha, 本当にありがとう。

大学のクラスメートとの Farewell party の様子

「オーストラリアでの学び」

芸術地域デザイン学部地域デザインコース
伊東大智

私はこのオーストラリア留学を通して３つの点で成長できたと感じる。
１つ目は英語でのコミュニケーションがよりスムーズに取れるようになったことだ。留学前、私は苦手としていたリスニング能力の向上を目標に掲げていたが、留学初日、ホストファミリーの話していることの半分以上を理解できず早速自信を失った。しかし、積極的にコミュニケーションを取り続けることで、徐々に英語での会話にも慣れ、ホストファミリーと食後に１、２時間会話したりもすることができるようになった。コミュニケーションを取る上で語学力は確かに重要ではあるが、本当に重要なのは自信を持って堂々と話すことなのだと改めて感じさせられた。ベトナム人やカンボジア人のクラスメイトとも、少し変わった英語の発音に最初は戸惑いながらも、積極的にコミュニケーションを取ることで徐々に仲を深めることができた。

クラスメイトとの写真

２つ目は、社会や環境への意識が変わったという点だ。実際に多国籍社会に触れていく中で、世界で起きている人種差別や宗教問題などの社会問題をより身近なものに感じるようになった。環境の面でもオーストラリアの雄大な自然や多種多様な動物に触れていく中で、自分を含めもっと多くの人が環境への意識を変えるべきだと改めて実感した。また、さまざまな国の文化や価値観を知っていくほど日本という国への理解が深まったように感じる。

コアラとのツーショット

そして３つ目は生き抜く力が身についたことだ。見知らぬ土地で身近に頼れる人もいない中での経験は、漠然とした言い方ではあるが自分自身を強くしたと感じる。全てを自分で決め、実行する。簡単なことだが、普段から優柔不断で人に頼ることの多かった自分にとっては、日本ではできない貴重な経験になったと言える。こうした経験は自分の価値観を豊かなものにするだけでなく、自信にもつながったと思う。

今回の留学を通して、数々の点で大きく成長できたと感じるのと同時にたくさんの課題も見つかった。語学力やコミュニケーション能力、計画性などまだまだ見直すべき点はたくさんある。留学前、留学中はもちろんだが、留学後の経験や学習にもつなげることで、さらに成長できるようにしたい。

今回の研修を振り返って

経済学部 1 年 福光希望

「SUSAP オーストラリア・ラトローブ大学プログラム」を通じて、オーストラリアの多文化主義と生活環境について学ぶ機会を持つことができました。この留学から得た新たな洞察について、以下で詳しく述べてみたいと思います。

最初に、オーストラリアの多文化主義についての感想について述べます。留学３日目に同じホームステイ先に滞在していたベトナム人留学生とその友達にピクニックに誘われ、一緒に楽しい時間を過ごしました。しかし、帰り道で現地の高校生たちが、白人同士、アジア人同士といったグループに分かれている様子を目にし、多文化主義についての考えが揺らぎました。学校の授業では、このような側面には触れられておらず、私は自身の理想的なイメージとのギャップに戸惑いました。初めは絶望的で寂しい気持ちに襲われましたが、40 日間の留学生活を通じて、異なる文化と人種の多様性を受け入れる多文化主義の実態に気付くことができました。実際にオーストラリアで過ごす中で、多様な宗教や思想を持つ人々が、自分の価値観に基づいて生活している様子を観察できました。例えば、日常生活でコスプレを楽しむ人からロックバンドのようなスタイルで街を歩く人まで、多様なファッションが当たり前でした。また、性的指向に関しても寛容な雰囲気が広がっており、レ

ズビアンのカップルが公共の場でキスをすることが特別視されないことに感銘を受けました。しかし一方で、大声で歌う人やホームレスの人に対しては、冷たい視線が向けられることがあり、これらの違いはその人々に対する一般的なイメージに関連していることに気付きました。このような経験から、イメージが、その人々が社会に受け入れられるかどうかに大きな影響を与えていることが明らかにすることができました。例えば、オーストラリアでは異なる文化や価値観に基づく生活が一般的であるため、見た目の異常さは異常でないと受け入れられる傾向がある一方で、日本では外国人の比率が低いため、外国人に対する異質なイメージが存在し、異なる文化を受け入れる社会が一般的ではないというような感じです。

　次に、オーストラリアでの生活について紹介します。オーストラリアでの生活は食事や洗濯を除いてほとんどの生活が日本と似たようなものであるという印象でした。しかし、洗濯が週１回であったり、食事は日本食を食べる機会はあるものの基本はオーストラリアの食事やホームステイ先の人の出身地域の食文化が受け継がれているような印象だったり、驚くことも多かったです。また、交通機関は遅れたり早くきすぎたりといったように時間にルーズな部分はあったものの、トラムやバスなどの交通機関は田舎の方でも発達していたり便利な部分が多かったです。最後に、オーストラリアで生活していて感じた良いところは、オーストラリアではすべての人に対してオープンマインドで接してくれる方が多かったところです。日本ではあくまでも立場の違いを認識しますが、オーストラリアではその線引きがあまりなく明るく接してくれるため買い物などが非常にしやすかったです。

　４０日間の留学で、オーストラリアの多様性に触れ、自身の価値観と異なる文化を尊重する重要性を学びました。また、この経験を通じて、多文化主義はすべての人々が社会的に受け入れられる環境を作り出すための基盤であることを理解しました。今後の生活では、新しい人と関わる際に彼らの価値観を尊重していくことを大切にするとともに、書籍や講義を通じて多文化主義についてもっと深く知っていきたいと思います。

「留学を振り返って」

農学部生物資源科学科　池上　遥

私は２０２３年８月２３日から９月２９日まで３８日間、オーストラリアに短期留学した。私がこのプログラムに参加しようと思ったのは今まで一度も海外に出たことがなく、海外で生活してみたいと強く思ったからだ。私の今回の留学の目的は大きく２つある。

１つ目の目的は、自分が海外の文化や生活様式に適用して生活できるか確かめることである。私は在学中に長期留学をしたいと考えているため今回のプログラムを次の目標につなげたいと考えた。最初のころは一週間に一度の洗濯、土足で生活すること食事の違いなどに戸惑った。ホームシックになり部屋にこもってしまったり、先の不安からホストマザーの前で泣いてしまったりもした。しかし、時間が経つにつれて文化の違いは自分の中で当たり前になり、ホストマザーともスムーズにコミュニケーションが取れるようになったことにより、最初に抱いていた不安は解消された。いつの間にか週末には

いろいろな場所に友達と行くようになりオーストラリアでの生活を楽しんでいた。私はこの SUSAP での海外経験を通して自分は全く文化の違う外国でも順応して生活していけるという自信がついた。

２つ目の目的は英語力を向上させることである。ラトローブ大学ではベトナムやカンボジア、タイ、イラク、サウジアラビアといった多くのアジア人の留学生とともに英語の勉強をした。今まで聞いたことがないくらい長いリスニング問題に取り組むことが多かったため英語を集中して聞き続けられる集中力が上がったのではないかと思う。また、課題やテストなどで２００字から４００字の英作文を書いた。私は１５０字以上の英作文を書いたことがなく、分量が多い英作文を書く際は構成を練っていても、自分の思ったような配分にならず、苦戦することが多かった。しかし、授業の中で演習量を積むことができたため、最終試験では４００字のエッセイを書けるようになった。授業ではスピーキングテストとしてメルボルンが抱える問題についてのプレゼンテーションを作成し、発表した。私はベトナム人のパートナーとマグパイアタックについてのプレゼンテーションを作成した。マグパイとはオーストラリアに生息する黒白の鳥で春頃になると巣を守るために人に対して攻撃的になる。マグパイアタックから逃げようとした人が車にひかれたりものにぶつかったりして死亡してしまう事故も発生しているため解決すべき問題である。このようにオーストラリアは日本では考えられないような問題を抱えていることが分かった。オーストラリアに行かなければ知ることのなかった問題の解決策を考えられたのは非常に貴重な体験だったと思う。私は今回の留学でたくさんの人と出会い、多くの刺激を受けることができた。私のクラスメイトは学校の授業やアルバイトなどで日常的に英語を使っていた。そのため私よりもスピーキング力は上だと感じた。スピーキング力をのばすためこれからは日々の生活に英語をアウトプットする機会を作りたいと思う。在学中に長期留学をして、英語を使う環境に身を置きたいと考える。

オーストラリアでの短期留学を通して

農学部１年　井上琴葉

私はメルボルン郊外にあるラトローブ大学に５週間通った。平日は毎日授業があり、放課後や週末には様々な所へ出かけた。そんな留学中に得た経験や気づきについて述べていこうと思う。

1. 日本との違い

オーストラリアで生活する中で日本とオーストラリアの様々な違いを発見した。

①飲食店

飲食店を比較すると、日本では日本食や洋食、ファストフードのお店が圧倒的に多いが、オーストラリアでは洋食からベトナム、インド、タイ、中華、韓国、日本などのアジア料理まで様々なジャンルの飲食店があった。さらに、ほとんどの飲食店でベジタリアンの人も食べられるメニューが用意されていた。他民族国家であるオーストラリアならではで、誰もが住みやすい環境が作られており、日本ももっと様々な国籍や宗教の人々が住みやすい環境を作るべきだと思った。また、CBD にある飲食店では席にある QR コードを読み取って、スマートフォンでメニューを選びクレジットカードで決済する方法も多かった。この方法は後でレジで支払う手間が省けて楽な一方で、もしスマホを忘れたり、充電が切れたりしていたる場合やクレジットカードを持ってない場合には購入

できないので不便な面もあるなと感じ、決済方法が選べるようにするべきだと思った。

②トイレ

日本では当たり前のようにトイレのマークの色が男は青、女は赤と分かれているが、オーストラリアでは生活する中で色で区別されたトイレのマークは１つも無かった。ジェンダーレスで日本も見習うべきだと思った反面、マークが目立たずトイレを探すのに苦労することが多かったので男女同じ目立つ色で統一したトイレのマークがあるといいなと考えた。また、日本ではほとんどのお店にトイレがあるが、オーストラリアではトイレのないコンビニやお店が多く不便だった。トイレの機能性に関して、日本はやはり優れているなと感じた。

③タオル

日本ではお風呂あがりに使うタオルを毎日変える人が多いだろうが、オーストラリアでは 1 週間くらいタオルを変えない人が多く驚いた。洗濯物が減り節水できるが、衛生的にはあまりよくないように感じた。

④ゴミ箱

オーストラリアでは CBD で道を歩いていると、ゴミ箱がたくさん置いてあり、すぐ捨てることができて良かった。そのおかげか、あまりポイ捨てされたゴミを見ることは無かった。日本でもポイ捨てを減らすために、もっとゴミ箱が増えるといいなと思った。

⑤タバコ

日本では分煙、禁煙がしっかりと行われており、最近外でタバコを吸いながら歩く人を見ることは少なくなったが、オーストラリアではタバコを道端で吸う人が多く、周りの人へ悪影響を及ぼすので日本のように喫煙室などを設けて対策するべきだと思った。

⑥水

日本よりオーストラリアの方が節水意識が高いように感じた。たとえば、オーストラリアでは油汚れのひどい皿は一度キッチンペーパーで拭き取ってから洗う、お風呂はシャワーのみで湯船に浸からない、洗濯物は週に一回など水を使いすぎないように気をつけていた。ここまでは行かなくても、日本ももっと節水を心がけるべきだなと思った。

このように、日本とオーストラリアでは様々な違いがあり、メリット・デメリットがあるので、お互い良いところを学び、よりよい国づくりができるといいなと思う。

2.授業

オーストラリアでの授業は少人数で行われ、日本のようにただ聞く座学ではなく、コミュニケーションを取りながら行うものが多かった。また、発表も自発的にしなければならない時もあった。そのため、自ら話しかけたり、発表したりする必要があり、積極性や自主性が必要だなと感じた。グループでのディスカッションも多く、最初の方はコミュニケーションを上手く取れなかったが、できるだけ積極的にコミュニケーションを取るように心がけたおかげで、クラスの全員と仲良くなることができ、英語でのコミュニケーションも上達した。この積極性を日本でも活かし、もっと様々な人と関わりを持てる人になりたいと思った。また、日本ではリーディング、リスニングのテストのみで英語力が評価される場合がほとんどだと思うが、オーストラリアでは英語でのプレゼンテーションも評価対象となるため、満遍なく 4 技能を磨くことができた。授業中、日本人はリーディングや単語は得意だが、やはりスピーキング能力は劣っているなと感じたので、日本でもプレゼンテーションやディスカッションのようにスピーキング能力をあげることができるような取り組みを行うと有効的だなと思った。日本でもオンラインスピーキングなどを活用して、スピーキングが衰えないように努力していきたい。

３.経験

私はこの 5 週間の留学中に現地でしかできない経験をしたいと思い、様々な観光地を休みの日に訪れた。そのために、ツアーを調べたり、どんな場所があるのか調べたりして、計画を立てた。これを通して計画力や行動力も身につけられたように感じる。また、コアラを触ったり、日本では見られないような大自然の風景を見たりと様々な経験をしながら、ツアーガイドの英語での解説に

よってリスニング能力も磨くことができた。そして、今回５週間しかないなら、様々な経験をしたい！と思い、毎日を大切に、充実させられるよう過ごした結果、今までに無いほどとても濃い５週間となった。その経験から、日本でももっと１日１日を無駄にしないように、充実させられるように、と考えて行動するべきだなと思った。特に大学生のうちは勉強、サークル、バイトなど様々なことに挑戦して、いろいろな経験ができるチャンスだと思うので、日本でも今回の経験を活かして、たくさんのことにチャレンジして毎日を大切に過ごしたいと思う。

４．出会い

今回の留学では、５週間すべてホームステイだった。私のホームステイ先のホストマザーはとても親切な優しい方だった。夕食の際に毎回会話をしていたのだが、私がたまに言葉が出てこず詰まってしまったり、聞き取れずに聞き返したりしても、嫌な顔１つせず話を続けてくれたり、最初私がとても緊張していた時にも積極的に声をかけたりしてくれた。また、一緒にステイしていた他の国の留学生もおすすめの場所を教えてくれたり、学校への行き方を教えてくれたりとてもやさしくしてくれた。そのため家では人の温かさを感じ、安心して過ごすことができた。学校のクラスメイトも最初はお互い緊張していたが皆とても優しく仲良くなることができたし、バスの運転手や店員さん、ツアーガイドの方なども親切にしてくださった。また、一緒に留学した SUSAP のメンバーも優しく良い人ばかりだ。今回の留学を通して出会った全ての人のおかげで楽しい留学生活を送ることができたので、全員に感謝してこれからも過ごしていきたい。そして、自身も見習って、親切にできる人、気配りのできる思いやりのある人になれるように心がけたい。

まとめ

今回のプログラムを通して、初めての海外で、本当にたくさんのことを経験し、学び、刺激を受け、成長することができた。この経験を忘れず、日本でも様々な場面で役立てて、自分をより成長させたい。

コアラとのふれあい体験

ツアーで訪れたビーチ

今回の研修を振り返って

農学部　坂田美羽

私は、大学入学前から留学をしたいと考えており、今回 SUSAP のオーストラリアの語学留学に参加しました。オーストラリアの自然はとても豊かだと聞いていてとてもオーストラリアという国に興味があったのと語学留学ということで自分の語学力を少しでも向上させたいということで参加しました。自分にとって留学自体初めての経験でこの留学中の経験はとても新鮮で、それらの多くの経験を積みながらたくさんのことを学ぶことができました。留学中での興味深く心に残った経験はとても多いためその内容の一部について書きたいと思います。

まず、ホームステイ先での生活についてです。私のホストファミリーはホストマザーとベトナム人留学生２人と犬二匹でした。そして、よくホストマザーのお母さんや友達、お孫さんが家を訪ねていました。ホストマザーは仕事をしており忙しそうな時もありましたが来客も多く賑やかな家庭でした。ホストマザーが晩御飯はみんなで食べようというルールを作ってくださっていたので、私はもともと話しかけるタイミングを逃しやすいですがたくさん話すことができました。誰かが話すと食事を止めて真剣に耳を傾けて聞いてくださったので、とても話しやすい環境だなと感じました。そして、私が用事で夜ご飯に参加できなかった時には私が帰るまで起きて待ってくださっていて、その日にあったこととか訪ねてくださったり、ハウスメイトが興味のありそうな話題だと部屋に戻っているハウスメイトを呼んでみんなで話す機会を設けてくれたり、コミュニケーションをとても大切にしていることがわかりました。ベトナム人のハウスメイトもとても優しく困った時はすぐに手伝ってくれたり、初登校の日は教室まで送ってくれたりしました。ホストマザーの仕事の都合上、月曜日と火曜日の夜は子供達だけで食事を作り食べなければいけませんでしたが、その際には３人で Netflix にある洋画やドラマをみながら楽しみました。また、日曜の夜は音楽番組を４人で見たり、マザーがオージーフットボールの試合観戦に行っている時は、その試合を３人でテレビで見て盛り上がったりできてとても楽しかったです。私の見つけたオーストラリアと日本の生活の違いは、まず水が貴重なため洗濯が週１・２回だったり、お風呂の使用時間が設けられたりしていることです。日本に住んでいると水が無限にあるように感じてしまいがちですが、同じ島国でも気候等の影響で自由に使えない地域があるということを実感しました。また、鳥と人との仲が良いということです。庭にはいくつか鳥のオブジェがあり、庭に植えている植物を食べるためによく鳥が集まってきていましたが、その様子を家から見守ったり、時にはマグパイにパンを手で渡したりしていました。多くの日本人にとってカラスやハトなどの鳥は、糞やゴミを荒らすといったことから厄介なものとして扱われがちです。オーストラリア内でも鳥の低空飛行やつつき等のことで問題視されている面もあるようですが日本よりもとても可愛がられていて驚きました。一方で、日本によくいる野良猫は危険視やゴミを荒らすと認識されているそうで一度も見かけることはなかったです。

次に、学校についてです。学校での授業は、少人数制でとても自発的な発言が多く驚きました。日本だとわからないことは授業後聞きに行こうかなと思ってしまいがちですが、授業中にすぐに聞くことでみんながその点について再理解できたり、周りの人が困っている人に協力したりすることができるためとても大切なことに気づきました。私のクラスには、いろいろな年齢の人がいてそれぞれにバックグラウンドがあり、どうにか留学できるように努力してきた人もいてすごいなと思いました。また、学校の設備として、祈りの部屋があったり、ムスリムの男性用トイレがあったり、アゴラのメニューにベジタリアンという記載があったり、中華系の食事が充実していたり様々な国籍の人も通いやすい大学ということがわかりました。

私は、留学中バディーと多く交流できました。そして、日本に興味を持っている人は多いことに気づきました。初めて２人で遊びに行った時におすすめのスイーツ屋さんがあるよと紹介してくれたのが日本のクレープ屋さんでした。初めは驚きましたが、お勧めしたいほど日本の食べ物が好かれていると思うと嬉しく思いました。オーストラリアには日本語の塾のようなものが存在していて通っている人は多いそうです。また、漫画や日本のキャラクターショップ、寿司屋等日本に関するお店が街の中に多くありました。オーストラリアでは、ラーメンと寿司を食べました。日本のものと見た目や味に少し違いはありましたが美味しかったです。バディーとは一緒に動物園にも行きました。日本によくある動物園と異なり広々とした檻の中に一匹だけで暮らしていたり、檻の中に草をいっぱいに生やして隠れられる場所をつくつてあったり、動物に負荷がかかりすぎないような工夫がしてあり、見られない動物が何種かいましたが動物に配慮があってす

ごくいい動物園だなと思いました。他にもシティーのいろいろなところを一緒にめぐりました。メルボルンは、芸術の街と言われえるだけあってたくさんの壁に絵が描かれてあったり、美術館の入場料が無料だったり、作品の撮影が許可されたりしてとても芸術を楽しむことができました。有名な壁画のロードの書き直しをしているところを一度見ることができたのはとても嬉しかったです。また、１日だけクラスメイトのカンボジア出身の子と休日に遊ぶことができました。いろいろ話すことでカンボジア人やベトナム人の子にとって他国の大学に通うことはよくあることだと知りとてもすごいなと思いました。

このように、とてもいい人たちに恵まれながら４０日間のオーストラリア留学をすることができました。いろいろな人と話すことはできましたがまだまだ自分の語学力が足りていないことも実感しました。この留学で経験し学んだことをこれからの人との関わり方や将来就く職業等で活かしていきたいと思います。そして、英語で流暢な会話をしたり、いつかまた留学に参加した際に今回よりもたくさんのことが学べたりできるように自分の語学力を今後も高めていきたいと思います。

ホストファミリーとの記念写真

『メルボルンでの出会いや経験が私を変える』

農学部　坂本奈愛瑠

振り返ってみると、オーストラリアのメルボルンで過ごした約 40 日は、新たな学びや発見、出会いなどがあり、毎日が充実していた。中学生の時に、地元の人材育成プログラムでブリスベンに一週間ほど滞在したことがあり、今回が２回目のオーストラリアであった。今回は、どのような出会いがあり、どのような経験や学びがあるだろうと現地の文化に触れることに対してワクワクした気持ちで一杯だった。しかし、出国が近づくにつれて、「ホストファミリーと仲良くなれるかな」、「現地の人の英語を聞き取って、会話できるかな」などのような不安も抱えていた。

私の今回の目標は、２つあった。それは、ホストファミリーやさまざまな国の留学生とのコミュニケーションを通して、日本のことについて紹介したり、他の国についても学んだりすること、何事にも果敢に挑戦することであった。

まず１つ目の目標については、ホストファミリーやクラスメイト、ツアーで一緒になった人々などたくさんの出会いや交流を通して、さまざまな学びや発見があった。特に、ホストファミリーとは、毎晩、何を学び、どのような経験をしたのかなど一日の出来事を話した。また、ホストファミリーはスリランカ出身だったこともあり、オーストラリアだけでなく、スリランカの食べ物や慣習なども教えてくれた。日本での生活の様子や年間行事、宗教などについても紹介したり、説明したりできた。「この日本語をどのように英語で説明すればわかりやすいかな。」と考えながら、自分の知っている英語表現を駆使して話すのは、難しかった。メルボルンでは、第二外国語として日本語を学ぶ小学生や高校生などがいることもあり、ひらがな、カタカナ、漢字について質問された時は、正直戸惑った。私は、それぞれの役割やどのように使い分けているのか、なぜ三種類も使うのかなどを一生懸命に説明した。これまで当たり前のように日本語を使って生活してきたが、日本語を言語化して説明するのは大変だったし、うまく伝えられず非常にもどかしかった。わかりやすい説明ができず、自分自身も腑に落ちない説明だったため、日本語について後から調べ直した。どのような順

番や内容で説明すればより理解してもらえるかを念頭に、伝えたい内容をメモした。しっかりと準備してから別の日に、日本語の説明にもう一度チャレンジした。今度は、ホストファミリーに理解してもらうことができた。私が伝えたかったことが相手に理解してもらえた時は、非常に嬉しかった。また、私が話している時に相槌をしながら聞いてくれていたので、失敗を恐れずに話すことができた。間違っていた時には、正しい表現を教えてもらい、新たな英語表現を学ぶこともできた。

２つ目の目標について、何事にも果敢に挑戦することができた。私が一番思い出に残っているのは、メルボルンシティーで街頭インタビューをしたことだ。これは、授業の１つであり、ペアでシティーが抱える問題点を１つ考え、街中の人々にその問題についての考えや意見をインタビューするというものだった。私たちは、交通渋滞についてインタビューした。私にとって、自分から話しかけることは難しかった。なぜなら、街中の人々は怖そうに見えたり、忙しそうに見えたりしたため、始めは彼らを横目に見ながらただ歩くことしか出来なかった。そこで、自分自身を奮い立たせるために、「彼らに話しかけることで、この状況を変えることができる！」と何度も自分に言い聞かせていた。とても勇気のいることだったが、一度、インタビューに成功するとその後は躊躇うことなく話しかけることができた。答えてもらう時には、わからないことや聞き取れなかったことを何度も聞いて、わかりやすく説明してもらった。この経験から、勇気を振り絞ってトライしてみることの大切さを感じた。チャレンジする選択をしたことで、より多くの人との交流を通して、さまざまな考えや意見を聞くことができた。自分の視野も広がったように感じている。

今回の SUSAP オーストラリア研修では、本当にたくさんの出会いがあり、一緒に話したり、笑ったり、感動したり、学んだり、食べたり…と数えきれないほど貴重な経験ができた。初めて教室に行った時、クラスの雰囲気が日本とは全く異なり不安や困惑を感じていたが、一緒に学んでいくうちにクラスメイトたちとも仲良くなることができてよかった。ランチを一緒に食べたり、お互いに教えあったりなど素敵な思い出ができた。また、週末には友達やバディとシティーに行ったり、ツアーに参加したりメルボルンならではの経験もできた。野生のコアラやカンガルーも見ることができ、とても充実していた。ホストファミリーや友達に誕生日を祝ってもらったことも嬉しかった。これからも、ホストファミリーやバディ、クラスメイトと連絡をとっていきたいと思う。

最後に、オーストラリアで満喫した日々を過ごすことができたのは、たくさんの人々のおかげだなと改めて実感した。このプログラムに参加するにあたって、経済的なサポートをしてくれた両親、私たちが学ぶ環境を提供してくださった石松先生をはじめ佐賀大学のスタッフの方々、ラトローブ大学の方々、私を家族の一員として本当の娘のように接してくれたホストファミリーに感謝している。英語漬けのメルボルンでは、どのような状況でも勇気を出して自分の行動を変えることで、新たな出会いや世界があり、自分自身の語学力や人間力を向上することができた。何事にもとにかく挑戦して、後悔のない人生を歩んでいきたい。

写真：参加したツアーで訪れた“十二人の使徒”

今回の研修を振り返って

農学部生物資源科学科　１年　村井志織

私は 8 月 22 日から 9 月 30 日の間 SUSAP のオーストラリアのプログラムに参加しました。今回が初めての海外で期待と不安を抱えながらの渡航でした。私がこのプログラムに参加した目的は 2 つあります。一つ目は実用的な英語力の向上です。二つ目は多文化社会のオーストラリアで多様な文化に触れ、様々な考え方を知ることです。ここでは主にこれら二つの目的についてとオーストラリアの自然について述べたいと思います。

一つ目の英語力についてです。オーストラリアへ行く前までは英語話者と話したり英語だけを使って生活したりすることがありませんでした。また、今まで英語の勉強といえば大学入試に向けてのライティング、リーディング、リスニングが中心だったのでスピーキングを勉強する機会があまりありませんでした。したがって、自分の英語をしゃべる力には自信が無いままオーストラリアへ向かいました。オーストラリアに着いてからは自分が思ったことを上手に伝えることができなくて悔しかったこともありました。しかし、オーストラリアに行ってから英語をしゃべることに抵抗がなくなりました。文法や単語が多少間違っていても自信を持って楽しくしゃべることが大事だと思いました。今回のプログラムをきっかけにもっと英語をしゃべれるようになりたいと思いました。ホストファミリーや学校の先生やクラスメイトは私の拙い英語でもいつでも理解してくれようとしてくれました。また、コミュニケーションではジェスチャーや表情がとても大事だと思うことが何度もありました。例えば、学校のクラスメイトは様々な国から英語を学びに来た学生だったので、英語を学んでいる途中のもの同士で意思疎通が難しいことがありました。しかし、簡単な文章とジェスチャーと表情で意思疎通できることも多くありました。私はオーストラリアへ行って表情が豊かになったと感じています。次にまたオーストラリアを訪れるときにはもっと英語をしゃべれるようになって今回知り合った友達やホストファミリーともっと深い話もしたいと思います。以下の写真はいつも優しくしてくださったホストファミリーとの写真です。

次に二つ目の文化についてです。オーストラリアへ行く前から様々な国出身の人がいると知っていましたが、実際にオーストラリアへ行って多国籍さに驚きました。様々な国の人がいるから、様々な国の飲食店がありました。日本料理屋さんも多くあって、特に寿司屋さんはどこへ行ってもありました。様々な国の人がいるからこそ異文化に寛容な人が多いという印象でした。休日には様々な場所に観光へ行ったが、私たちが日本人だとわかると日本語で話しかけてくれる人が多くてうれしかったです。オーストラリアの文化としてはオーストラリアの先住民族であるアボリジニの文化などがあって、美術館や展示館で伝統的な文化を知ることができました。また、学校のクラスメイトとも授業の中でそれぞれの国の文化について話す機会がありました。一緒に学んだり一緒に遊んだり一緒に笑ったりできて、それぞれの国で違いが

あっても似ているところもたくさんあるなと思いました。様々な国籍の人と知り合うことができてとてもいい経験になりました。

三つ目はオーストラリアの自然についてです。私たちはオーストラリアの中でもメルボルンに行きましたが、メルボルンは街の中心に行くと都会で少し中心から遠くへ行くと豊かな自然が広がっている魅力的なまちでした。メルボルンで一番驚いたのは鳥の多さです。学校へ行く途中に様々な種類の鳥を見ることができました。オウムのような緑の鳥がいて綺麗でした。また、休日にはツアーで海やペンギンを見に行きましたが、海は青くてとても綺麗で、広大な草原に羊や牛がいたり、近距離で野生のペンギンを見たりとても自然が豊かで心が綺麗になった気がしました。

このようにオーストラリアでの 40 日間はあっという間でした。このプログラムに参加したことをきっかけにたくさんの人に出会えて、英語を学んだり、自然に触れたり毎日が貴重な体験ばかりでした。今回知り合った人たちや、今後新しく知り合う海外の人とも交流を続けていきたいと思います。